

大分県 現代俳句協会 会報

第117号

令和元年8月30日



現代俳句歳時記

【芙蓉】 酔芙蓉 白芙蓉 紅芙蓉

中国原産の落葉低木。早朝、淡紅・白などの大きな花を開き夕方にはしぼむ。白い花が夕方にはまるで酒に酔ったように赤みを帯びる園芸種は酔芙蓉と呼ばれる。芙蓉閉づ をんなにはすぐ 五時が来て 坂間 晴子

6月10日（日）大分市センチュリーホテル大広間（桜の間）で第60回九州俳句大会が開催された。この大会は九州俳句作家協会が毎年各県持ち回りで開いているもので、大分での開催は第54回大会（成清正之大会会長）以来6年ぶり。大分県現代俳句



第60回九州俳句大会

1席谷川彰啓氏、2席上田たかし氏

く感謝したい」と挨拶した。

福本弘明九州俳句作家協会事務局長の挨拶のあと、第51回九州俳句賞の発表と表彰が行われた。今年の受賞者は福岡県の田中葉月氏。

このあと大会は第60回大会の入賞句の発表に移った。作品数にふさわ

協会も後援団体として、主体的に取り組んでいる。大会会長兼実行委員会委員長は当協会会長の有村王志氏。事務局長は当協会顧問の谷川彰啓氏、事務方は足立攝氏が担当し、実行委員は全員が当協会の会員で構成された。

午前9時、足立攝氏の司会で大会は定刻に始まった。会場には一般の方の参加者も多く、70名が詰めかけた。始めに元会長で現顧問の河野輝暉氏からの祝電が披露され、続いて有村王志大会会長が「一時は投句数が伸びずに苦労したが、県協会と各県の協力により、千六百五十三句という、かつてないほどの数の作品を集めることができた。厚



大会全景

第60回九州俳句大会受賞者

〈大会大賞〉

(二席)

にんげんを見飽きた花から散ってゆく

谷川彰啓氏



大会三役



盾の紹介



大会大賞
谷川彰啓氏



九州俳句作家協会賞
上田たかし氏

〈九州俳句作家協会賞〉

(二席)

改憲論もう棄校になっている

上田たかし氏

〈九州地区現代俳句協会賞〉

(三席)

月光に刺されてからの不眠症

田口辰郎氏

蝶吹かれ白い音符になる草原

有永真理子氏

〈大分県現代俳句協会賞〉

山国の喜怒哀楽を畦に塗り

有村王志氏

〈大会会長賞〉

鳥帰るまだ濡れている村の空

梶原千代氏

〈大会会長特別賞〉

米寿なる自祝の屠蘇となりけり

江藤清彦氏

〈優秀賞〉

ヘイタイもコメもデンキも出して過疎

坂本一光氏

〈ジュニア賞〉

学校の図書室が好き秋が好き

高悠介さん

〈ジュニア奨励賞〉

春の波会話が動くレストラン

合田英伶奈さん

おんぶして背中の中春を感じけり

合田陸翔さん

〈優良賞〉

農継がぬ子ばかり成して春田打つ

小野智輔氏

潤れ川に石蹴ってゆくまだ闘える

成清正之氏

地下足袋を取り替え令和春田踏む

井上 治氏

一本の補助線欲しき秋思かな

小野宣子氏

石ころが神になる日の白木蓮

足立 攝氏

紫陽花のひとつかたまりの暗さかな

立麻琴路氏

若き日を解き一日毛糸編む

豊國隆信氏



ジュニア賞受賞：高悠介さん

《奨励賞》

露味憎の瓶に故郷が詰めてある

飯田幸子氏

蛇穴を出て子どもに囲まれる

稲田久美子氏

たんぽぽや風に乗れない絮いくつ

田代直之氏

九条を知らずに逝きし兄に夏

万葉太郎氏

女寝る寒の卵を産むように

河野輝暉氏

柏手の届く近さに桜鯛

河野則子氏

蜚舞うもう人間に戻れない

赤嶺信子氏

永き日の手首にうすき輪ゴム痕

瀬川剛一氏

まだ逝けぬあその草を抜くまでは

灘波瑞穂氏

七十年戦火なき世の青田風

田中英俊氏

可愛気のない婆でよし春炬燵

高木礼子氏

第1回 幹事会開催（大分市コンパルホール）

情勢にふさわしい協会の発信力を

幹事会終了後に懇親句会

7月25日（木）大分市コンパルホール312会議室で、第1回幹事会が開催された。幹事会の任務は2月の総会で決議された事項の進捗状況を確認し、協会の方針を滞りなく進めるためのものである。（会則8条3項、及び12条）

幹事会にはまず入会者と退会者を確認し、2月の総会以降6人の会員を協会に迎えているが、高齢や死亡などで退会した会員が4名いて、拡大の道のりは思っている以上に困難であることを共通認識にした。後援の第60回九州俳句大会が成功

赤子抱いて女かがやく花の昼

神 慶子氏

遠足という青空の予約席

平田千代子氏

薫風の度々通る自動ドア

岸本千鶴子氏

錆ついたジャングルジムを抱く桜

鎌倉真由美氏

フクシマを片仮名にして春めぐり

三丸祥子氏

長き夜の病衣なじまぬふくらばぎ

伊藤利恵氏

缶切りを使えぬ母や多喜二の忌

松廣李子氏

裏に終了したと（1面）3面参照。

九重宝八幡「第18回アジサイまつり」は当協会員甲斐素純氏の事業であり、地域の俳句文化発展の観点から県協会から1万円を寄付したこと。

会報、及び句会報発行の件などが報告された。なお会報は現在B5版で発行しているが、活字を大きくするためにA4版に移行するべきかどうかも検討された。A4版への移行については全員の賛成を得たが、重要な課題であるので、今後役員と会員の意見を聞きながら慎重に対応していきたい。

また、総会決定事項である大分県現代俳句協会賞と年間一句賞も現状通り進めることを確認した。協会賞の選者は「現代」に対応するため、随時補充強化していく方向である。協会の発信力を高めていくための施策として、本年10月から4年ぶりに吟行俳句大会を開催する。再開第1回となる今年は、豊後大野市で行うことが確認された。（詳細4面）今後、年に一〜二回の吟行大会と協会主催の勉強会、研究会等を増やしていく。昼食のあと、幹事会で懇親句会を楽しんだ。（関連5面）懇親句会には役員会など、今後機会あるごとに開催していきたい。

錦秋の三重町を詠む！

第19回 大分県現代俳句協会 吟行大会

大分県現代俳句協会主催の吟行俳句大会は、一九九三年（H5）10月の臼杵石仏吟行を第一回とする伝統ある行事です。平成15年から平成17年までの3年間は年に二回開催されていきました。



三重町駅前の風景

現在は直近の平成27年の玖珠吟行大会以来、休止されています。県協

会の総会決定にもとづき、再開第一回（通算19回）の吟行大会を豊後大野市三重町で開催することになりました。大会のお世話は三重町の狩野句会が実行委員会を組織して担当します。実行委員会委員長には、狩野句会代表で、当協会副会長である上田たかし氏が就任しました。実行委員会では「路三重句会」をはじめ、地域の俳句グループや俳句愛好者に積極的に呼びかけていく予定です。豊後大野市、豊後大野市教育委員会、大分合同新聞が後援します。

吟行場所は三重町駅から会場である市役所までの道筋、市役所裏の三重川周辺をメインとしますが、「錦秋の三重町を詠む」に関連した内容であれば細かい制約はありません。

市役所までの市場旧道周辺には、歴史的建造物が点在していますので、戦国時代から商業都市として栄えた三重町の歴史にしばしタイムスリップすることが出来ます。

今年は九州俳句大会、来年は当協会の30周年関連イベントのため吟行俳句大会は年一回しかできませんが、平常年は年二回のペースを守っていきます。今のところの開催予定地は大分市、別府、日田、中津、国東などですが、年二回のペースになればあつという間に回ってしまいます。

吟行句会は地域が主体です。例えば大分市でいえば、府内町大会、萩原大会……のような細分化した開催も可能です。会員のみなさんのすぐ近くの地域で行うことに意義がありますので、数名を集められる方はぜひ事務局に名乗り出てください。

また吟行大会のほか、句会や勉強会、講習会なども各地域で開催していきたいと思えます。会員の一人ひとりの方が俳句文化を地域で根付かせる運動に参加して下さることを願っています。

Ⅱ 吟行大会要項 Ⅱ

- ・ 10月6日（日）小雨決行
- ・ 豊後大野市市役所2階

中央公民館視聴覚室

・ 午前11時半投句締切（会場で投句）

・ 参加費無料（筆記用具持参のこと）

◇ 初心者の方、会員外の方歓迎

◇ 10時から11時半までに投句

◇ 一人二句出し。投句用紙は会場で

◇ 食事は投句のあと各自で

◇ 大会は12時半から開会

◇ 16時が終了予定

◇ 広い無料駐車場があります

Ⅱ 大会実行委員長

上田たかし氏の挨拶 Ⅱ

この度三重町で14年ぶりの吟行俳句大会を開催することになりました。花鳥風月や名所旧跡を詠むだけが俳句ではありません。三重町市場の人々の生活や、三重川周辺の何げない景色も立派な俳句の題材です。自然と、そこで生活している人の喜怒哀楽などを自由に詠んでみましょう。秋のさわやかな一日を俳句で楽しんでみませんか。

第22回 大分県現代俳句協会賞募集

大分県現代俳句協会賞は長い間中断していましたが、総会決定にもとづき昨年から復活しました。今年は第22回の募集になります。この賞は県協会の目指す俳句の方向性を内外に示すとともに、県協会の質的向上（応募者・選者とも）をはかる目的で制定されました。過去にのべ21名の受賞者を輩出しています。以下の要領でふるって応募ください。

〈応募要項〉

応募資格…県協会員であること

（同賞受賞者は除く）

作品…20句（一人一編限り・必ずタイトルを付けてください。平成30年10月～令和元年9月の作品。既発表、未発表は問わない）

応募用紙…横方向縦書きのA4原稿用紙使用のこと（ワープロもこれに準ずる）。誰でも読める字で書き、右の欄外にタイトル、左の欄外に氏名（俳号）を明記する。

締切…10月17日（木）消印有効
応募料…2千円・小為替等を作品

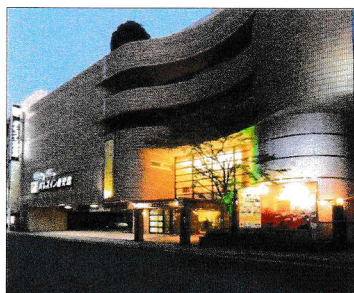
に同封のこと

送り先…事務局（足立）まで

選者…委嘱中

注意事項…作品は一句一句の出来映えの他に、20句一組のタイトルを含んだ完成度も選考の対象になります。応募後の訂正には応じられません。返却はしないので、必要ならコピーを取ってください。選考は、条件を揃えるために作者名を伏せ、活字化して選者に渡します。活字化の際は十分見直しますが、難読が原因による打ち間違いは、応募者の責任とします。

第12回 九州地区現代俳句大会のお知らせ



九州地区現代俳句大会は、現代俳句協会九州地区連絡会が主催して、二年に一回各県持ち回りで開催しています。本年はその開催年にあたり、担当県は鹿児島です。大分県は直近では平成27年の第10回大会を担当しています。こうした大会は、担当者のボランティアによって支えられており、俳句文化の土台のひとつになっています。私たちが普通に俳句に親しみ、俳句について語れるのも、こうした

第1回幹事会後の懇親句会作品

第一回幹事会終了後、幹事会で一人三句出しの懇親句会を行いました。その時の作品の一部を紹介します。

未来図のすり切れてゐる半夏生

白水風子

平和の礎二名追加や仏桑花

井元扇岳

靴紐を直す少年夏來たる

菅登喜子

父の忌を終え炎帝の長い舌

足立 攝

この先は自恃の営み田水沸く

田中 充

行く末は風に任せて草むしる

田代直之

活動の総和のおかげです。これがなければ俳句はすぐに衰退してしまうでしょう。今年大分が担当した九州俳句大会でそのことを痛感しました。大会作品の応募と、あわせて大会への出席をお願いします。大会の内容は以下の通りです。

日時…令和元年11月30日（土）

午後12時より受付

大会…午後1時～午後5時

会場…ホテルパレスイン鹿児島

099（223）1111

講演…中村和弘（本部協会会長）

「新編俳句と九州の俳句作家たち」

対談…斎藤慎璽（俳人 深夜叢書社主）

・高岡 修（俳人 詩人）

「俳句の現在／俳句の未来」

投句…二句一組千円、参加資格不問

宛先…〒892・0836

鹿児島市錦江町11の13の

606ジャプラン内

電話…099（210）7713

締切…令和元年十月十一日（消印）

選者…委嘱中

宿泊…今回は一日完了の行事です。

宿泊者はご自分でご予約を。

※鹿児島から依頼された案内兼投句

用紙を同封しています

「私と俳句」

飯田 幸子

私が初めて俳句に接したのは、田原千暉さんの「山々は雪の伏流ピラカンサ」という句だった。この句は「すべてが死に絶えたような厳しい冬の中でも、雪解け水は大地の伏流となつて巡り、やがてこんなにも赤いピラカンサの実を育てるのだ」という内容で、私たちが目指している民主主義実現のための運動と同じだなあという意味で心打たれた。私も「雪の伏流」でありたいと思った。



しかし当時は、私が大分市議として多忙を極めていた頃で、自分が俳句を始めるまでには至らなかった。その後、病気で退職した頃、とある句会に誘われ入会した。月に二・三句出して句会を楽しんでいたが、そこでは俳句の基本などを学ぶことはなかった。

ある日その句会に成清正之先生が来られたことがある。先生は一句一句の言葉について、的確で厳しい批評をされた。この先生に教えていただきたいと思った。

先生にその旨をお願いすると、気持ちよく受け入れてくださった。先生の個人授業は、月一回ではあるが、とても密度の濃いものであった。

「魚の釣れそうな場所を見極めなければ魚は釣れません。俳句も同じことです。感動を中心に俳句に詠むのです」

その後しばらくして先生は、「吾らが食う鰯に光る鱗なし」と書いた

色紙をくださり、「これは田原千暉さんの句です。飯田さんはこれからこのような俳句を目指さない」と言われた。私は、その句から千暉さんの生涯を通じての決意を読み取り、強く心を揺さぶられた。庶民の暮らしに寄り添うこと、感動はその中にあることを学んだ。今でも先生の言葉と、千暉さんの句を昨日のことのように思い出す。

夫が九年前旅立った。そのころ私は油絵を習っており、県美展に出して三回入選していた。まだ俳句は時折といった程度だった。ところが夫が亡くなると、油絵はふつりと止めてしまい、俳句に気持ちが強く寄つていった。「あと二回入選したら県美協の会員になれるのになぜやめるの？」と友人たちに問われた。そして気がついた。「俳句は自分の気持ち

ちを詠めるから」と。

夫が亡くなって自分の気持ちを俳句に託して次つぎと詠んだ。

夫逝きしあと茫々と夏暗し

悔いてばかり夫亡き家の木樫咲く

鳥打帽の面影追ひぬ秋の暮れ

俳句を通じて夫に語りかけ問いかけることができ、気持ちが安まつていったような気がする。

しかし、俳句はむずかしい。

「いちばん言いたいこと、結論は隠せ」「説明と観念は俳句の敵」

などなど、成清先生の言葉が私の耳から離れない。俳句は私にとつて、いつでも聳え立つ高い峰である。この道を登って行くのは苦しいが一步一步、楽しみたいとも思っている。

(このエッセイの原稿を募集します。編集部にお問い合わせください)

第1回雑詠句会結果発表

句会報第1号でお知らせした、第1回雑詠句会の高得点句です。

〔11点句 ※2句〕

名月を蹴とばし妻が家出する

田口 辰郎

〔12点句 ※1句〕

中七が拗ねたままなり葱坊主

夏服の首透きとおる十五歳

白水 風子

足立 町子

〔10点句 ※4句〕
幸せの形そのまま夏布団

小野 智輔

田を植えて直会の膳村生きる
福井トミ子
甜瓜わつて昭和を確かめる
鎌倉真由美

会員が自由に交流できる場所づくりを
目指す大分県現代俳句協会

ひと

10年にわたって幹事長として大分県現代俳句協会を支え、会長に選任された。「現代を生きている人間をうたうのが現代の俳句。協会には会員が主役であり、有季、無季、文語、口語、自由律など多彩な作句傾向を持つ人たちが自由闊達に交流し、研さんを重ねる場。その調整役が私の仕事」と言う。「最近自分のように若い時から結社などに入る人間は減り、新聞の投稿欄などから始める人が増

研さん重ね多彩な作句を



えた。軽いのではない、簡易平明な句ができるようになるには10年かかる。鑑賞眼はいいものがあるし、みんな真面目なだけにそこをどう引き伸ばしてゆくか」と育成にも意欲をみせる。「いろいろな大会にどんどん投句してほしい。賞が全てというわけではないが、若い人にはそれが励みになる」

1962年、大分合同新聞読者文芸欄の選者だった故田原千暉さんが主宰する「石」に入会。67年、第3回大分合同読者文芸年間賞を受賞した。俳句から離れた時期もあったが、故金子兜太さんの句に触発され30歳で本格的に再開。金子さん主宰の「海程」に投句を始め、73年に新人準賞を受け、同人になった。

日田市出身。県職員時代に、結婚を機に最初の勤務地だった竹田市に永住した。エンドウ、タマネギなどを種から育てる家庭菜園が楽しみ。妻と犬1匹と暮らす。本名は英幸。
(吉村智江美)

有村 王志さん(76)

大分合同新聞「ひと」欄・2018年4月21日朝刊3面に掲載分

近道のなき炎天にさしかかる

梶原 千代

〔9点句 ※3句〕

黙禱を解けば高鳴る蟬時雨

足立 攝

生きてまた消えゆく村や土匂う

田中 充

白シャツに千の風入れ生きている

上田たかし

〔8点句 ※6句〕

さよならと言わず夏葉黄嚙んでいる

足立 攝

枯野来るひとり死者の帽被り

成清 正之

リラ冷えや齒科のおかしな椅子に寝る

瀬川 剛一

宇佐平野掩体壕の初夏の黙

倉迫 順子

青葉騒入所を決めた母という

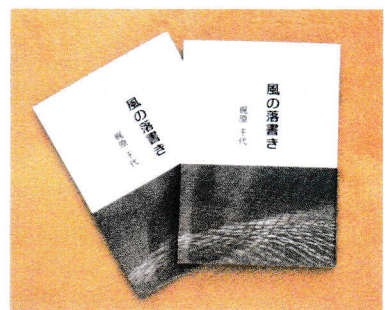
鎌倉真由美

若き日の父の掌にある桑母

陣野千恵子

第2回 雑詠句会 募集

当季雑詠三句をハガキかFAX、メール等で編集部までお送りください。締切は9月30日金曜日まで。(当日消印有効) 雑詠句会の作品は年間一句賞の対象になります。



梶原千代氏(豊後大野)
句集「風の落書き」を出版

来年米寿を迎えるご本人のために、ご息女のと田明美さんがプレゼント。当協会副会長、上田たかし氏の序文。余寒なお要観察の心電図、肩書きを拍手で消して花の宴、日脚伸び少し遠出の車椅子、若竹のどの節からの反抗期、たつぷりといくさ無き世に水を打つ、稲刈りし余熱の中に村ねむる

(編集部抄出)

【新会員紹介】

鍛田 建一(大分)

おにぎりとおしりをのせて春を漕ぐ

稲田久美子(豊後大野)

教室の窓に残暑が居座れり

句集のお問い合わせは事務局まで

